

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520504
 研究課題名（和文） 第一言語・第二言語（外国語）の社会語用論的言語能力の習得における臨
 界期
 研究課題名（英文） The Critical Period Hypothesis (CPH) and socio-pragmatic competence
 in first and second language acquisition
 研究代表者
 川手-Mierzejewska 恩 (KAWATE-MIERZEJEWSKA MEGUMI)
 聖学院大学・人文学部・講師
 研究者番号：60398542

研究成果の概要：第一言語や第二言語（外国語）の社会語用論的言語能力(実社会において言葉
 を適切に使いこなせる能力：以下語用論的能力とする)習得における年齢のもたらす影響を臨
 界期(努力をせずに言語習得が可能な時期)が存在するか否かに焦点をあて、間接的データによ
 り明らかにすることを目的とした本研究では、母語においては語用論的能力習得に臨界期があ
 るかもしれないが、中間言語においてはそうでもないかもしれないということがわかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：中間言語語用論 (incl. 心理言語学、神経言語学、言語習得)

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得理論、臨界期、語用論的言語能力、心理言語学、社会語用論的言語能力、神経言語学、中間言語語用論、社会言語学

1. 研究開始当初の背景

本研究の要である『臨界期仮説(critical period hypothesis)』は、過去20年間以上にわたり、多くの応用言語学者に研究されているが第二言語(外国語)習得におけるその有無は、未だ議論をかもすものである。臨界期仮説によれば、人間は努力なくしても言語習得が容易になせる時期があるという。第二言語(外国

語)教育においては、臨界期仮説は第一言語におけるとらえ方と少し異なる。例えば、目標言語母語話者のような発音を目指すのであれば臨界期仮説は支持できる(Ellis, 1985; Scovel, 1988)が、早期外国語学習への取り組みがいい結果を生むとは言いきれない(Scovel, 1988)という。Seliger(1978)は、臨界期仮説はそれ

ぞれの技能(音声、統語、意味)によって異なるのではないかともいう。

また、臨界期と方言に関する研究をみても、多くの研究が発音に関して臨界期仮説を支持している。Labov (1966)や Scovel (1988)は、思春期を過ぎてしまうと新しい方言の習得は難しいと報告しているし、日本語においても新しい方言の、ピッチアクセントの違いを大人になってから身につけるのは困難なようだ(Kawate-Mierzejewska, 2004)。

以上、内外で発表されている臨界期(Montrul, 2008)に関する研究は、殆どが音声に関するものであるため、本研究では今までに殆どなされていない語用論レベル習得における臨界期の有無をその要因と共に探ってみようと考えた。

上記に加え、語用論研究に関しては以下のような経過がある。研究代表者は、異文化間比較語用論を専門とし、母語話者や第二言語学習者による、ほめ言葉とそれに対する返答、謝罪、依頼と断りなどの数々の発話行為を中間言語語用論、心理言語学、社会言語学的視点より研究してきた。しかし、それらの研究は、実際に母語話者や学習者が、それぞれの発話行為をどのようにおこない、また如何にそれらに対処するかというものであり、発話行為の習得過程や習得時期などに関してのものではなかった。そこで、本研究は、習得過程における語用論レベルでの社会語用的言語習得における臨界期の有無についての解明を試みた。

2. 研究の目的

(1) 目的

語用論的能力の習得が言語習得のどの段階で行われるかということの解明を目的とする。また、語用論的能力の習得における年齢の与える影響も考えてみる。具体的には、

日本語と北米英語の語用論的能力習得における臨界期存在の有無をその要因と共に明らかにすることにより、第一言語、第二言語習得という異なる状況による視点より語用論的能力習得に関する特徴や問題点等を吟味し、効果的かつ適切な教授法を模索していくための基盤を構築する。

(2) 枠組み (仮説)

本研究は、臨界期仮説を基に、関東に引っ越してきた時期が異なる日本語母語話者二つのグループ、日本に来た時期や日本語学習歴の異なる北米英語話者の二つのグループの発話行為をそれぞれ比較し、臨界期の有無の間接的な証拠の確立を試みた。つまり、小学校に入学する前に引っ越したグループが関東で使われる方略を使い、小学校を卒業してから引っ越してきたグループは引っ越した時から何年も関東に住んでいるにもかかわらず、関東で使われる方略を使わない傾向にあるということがわかれば、それを以って、語用論的能力は中学に上がる前の母語習得・発達過程で身につけてくるに違いないと想定できる。また、関東に何年も住み日本語も堪能な北米英語話者が関東(日本語)で使われ発話方略を使わず、日本語を話しているにも関わらず英語のそれを使っているとしたら語用論的能力は母語習得過程で身につくに違いないと考えられる。つまり、いずれのケースも、生理学的見地からすれば、間接的な証拠ではあるが語用論的能力の習得にも臨界期があるのではないかと考えられるわけだ。

3. 研究の方法

(1) 参加者

関東に住む3つの異なるグループより成る日本語を母語とする68人(関東で生まれ育った44人、関西で生まれ、小学校にあがる前に関東に引っ越してきた8人、それから思

春期を過ぎてから関東に引っ越してきた 16 人)と同じく関東に住む 3 つのグループから成るアメリカ英語母語話者 71 人(研究調査が行われた時点で日本に来て 2 週間以内のアメリカ英語話者 35 人、その時点で独学でない日本語学習歴が 1 年以上で滞在歴が 3 カ月以内という日本語学習者 18 人、そして同じく独学でない日本語学習歴が 2 年以上で日本滞在歴が 1 年以上という日本語話者 18 人)が本研究に参加してくれた。

(2) 研究調査マテリアルとデータ収集過程

予備調査での関西と関東の発話行為の違いや先行研究からの日本語話者と英語話者の発話行為の違いをもとに、本研究ではそれぞれのグループの違いが最も顕著に表れた『身内を語る』という状況を選んだ。

データ収集は、日本語版と英語版の両方から成る談話完成テストを使い、『友人を自宅での食事に招待する時に、自分自身の母親のことをどう話すか』という内容で以下のような調査をした。

あなた:『母が、(君を) 食事に招待したいって
いうんだけど金曜日うちで食事
しない?』

友人:『ありがとう。よろこんで。お母さん
にお会いするのがたのしみです。』

あなた:『母は ()』

(3) 収集データ分析方法

① 日本語データ

まず、日本語母語話者 68 人から、収集されたデータは、全体で 121 の発話となった。内訳は、関東で生まれ育った 44 人からは 71 の発話、小学校に上がる前に関東に引っ越して 8 人からは 14 の発話で、思春期を過ぎてから関東に引っ越してきた 16 人からは 36 の発話を得た。そして、アメリカ英語を母語とする中級日本語学習者(日本に来て 3 カ月以

内) 18 人からは 29 の発話を得られ、アメリカ英語を母語とする上級日本語話者(日本滞在 1 年以上) 18 人からも同じく 29 の発話を得られた。

分析に際してまず、全ての発話は、話し手と聞き手、そして内容という二つの観点から、『その場にはいない母親を褒める』『その場にはいない母親に代わって話す(母親のために)』『聞き手に対しての発言』『家族としての発言』『話し手の気持ちを述べる』『その場にはいない母親のことを謙遜する』という 6 つの大きなカテゴリーに分けられた。

そして『その場にはいない母親を褒める』というカテゴリーは、母親の何を褒めるかという内容を考慮し、更に『外見』『人柄』『能力』という 3 つのサブ・カテゴリーに分けられた。次に『その場にはいない母親に代わって話す』という項目だが、これは、話し手が、母親が言うだろうことを想定して、代弁するもので、英語を使えば“she (3 人称単数)”で始まる発話である。発話の内容を基に、『社交辞令』『代弁(聞き手に対する気持ち)』『代弁(お料理に関すること)』『人物紹介』という 4 つのサブ・カテゴリーに分けられた。次の『聞き手に対しての発言』(英語を使えば“T”で始まる発話や“can/could you...?”)にもサブ・カテゴリーがあり、『希望・前向きな意見』『依頼』『提案』『感謝』『代弁(聞き手のために)』『好意(聞き手の好みを聞く)』に分かれた。更に『代弁(聞き手のために)』と『好意(聞き手の好みを聞く)』に関してだが、前者は日本語のデータには該当がなかったが、英語のデータとの比較のため便宜上入れておいた。そして次の『家族としての発言』であるが、これは、話し手の発話は同時に母親のものであるというもので、英語を使えば“we”にあたるものである。「金曜日にお待ちしていますね」というような『社交辞令』がこ

の項目に入った。これらの他の項目として『話し手の気持ちを述べる』というのがあり『直接的』(e.g., 君に会わせるのが楽しみです)とか『間接的』(e.g., 僕はいつも母に君のいいところを語り聞かせているからね)というサブ・カテゴリーを作った。以上見てきたような『褒める』『中立』という立場での発話に加えて、『謙遜』と考えられる発話も見られたので、『その場にはいない母親のことを謙遜する』というカテゴリーを作成し、『前向きな謙遜』(e.g., 御馳走をふるまってくれるらしいよ)と『否定的な謙遜』(e.g., 料理には期待しない方がいいよ)に分けた。

以上のように121の発話を2人で分類した後(分類者間の信頼性90%以上)、それぞれのカテゴリーの発話回数を数えて、それぞれのグループの発話の類似点や相違点を吟味した。

② 英語データ (63の発話)

英語データは日本に来て2週間以内の35人の英語母語話者から収集された。日本語データとの比較のため、それらも、日本語母語話者のデータを分析する時に使われた6つの大きなカテゴリーに分類された。英語データは英語母語話者や日本語母語話者の日本語データとの比較のために使われた。

4. 研究成果

(1) 日本語母語話者(第一言語)の語用論的能力

関東で生まれ関東育ちのグループ(以下、関東グループ)による発話は、関西で生まれ思春期を過ぎてから関東に引っ越してきたグループ(以下、思春期後のグループ)による発話との相違点が多いが、関西で生まれて小学校に入学する前に関東に引っ越してきたグループ(以下、小学校入学前のグループ)による発話とは共通点が多かった。具体的には、思春期後のグループは、西日本でよく使われ

る(予備調査の結果より判明)『母親を褒める』という発話が多かった(12/20)のに対し、関東(6/20)や小学校入学前(2/20)のグループでは、あまり見られなかった。

一方、関東や小学校入学前のグループでは『その場にはいない母親に代わって話す』(関東43/71、小学校入学前7/14、思春期後11/36)という項目で、『母親に代わって社交辞令をいう』という発話が多くみられた。本項目では、関東グループの80%(34/43)、そして小学校入学前の殆ど(6/7)は『母親に代わって社交辞令をいう』内容の発話が多かったが、思春期後のグループの場合は、約半数だけの発話(6/11)がその内容だった。これより、思春期後のグループは、関東の社交辞令的な発話は好まないかもしれないと考えられる。

以上、身内を語るような状況においての語用論的能力は、母語習得の過程で発達し小さい時に養われた能力は大人になっても好まれるのかもしれない。結果、思春期を過ぎてから異なるダイアレクトの語用論能力を発達させ習得するのは難しいのかも知れない。

(2) 英語と日本語の語用論的能力の比較

英語と日本語を比較した場合、英語では母親を『褒める』という方略が頻繁に使われる(英語20/63、日本語6/71)のに対し、日本語では『その場にはいない母親に代わって話す』(日本語43/71、英語26/63)という項目で、母親に代わって『社交辞令』を述べる(日本語34/43、英語13/26)傾向にあることが分かった。興味深いことに英語の発話は、思春期後のグループによる発話との共通点が多かった(前述の結果参照)。

(3) 北米英語を母語とする日本語話者(第二言語)の語用論的能力

まず、英語母語話者(20/45)によってよく使われる45の発話総数から成る『褒める』(各

グループの全体の発話数からみた『褒める』の占める割合：英語母語話者 20/63、日本滞在 3 カ月以内の日本語を話す英語母語話者 [以下、日本滞在 3 カ月以内のグループ]14/29、日本滞在 1 年以上の日本語を話す英語母語話者 [以下、1 年以上のグループ]5/29、日本語母語話者 6/71) という項目では、日本滞在 3 カ月以内のグループ (14/45) の方が 1 年以上のグループ (5/45) より母親を褒める傾向にあった。次に『その場にはいない母親に代わって話す』という項目の 62 の発話より成る『社交辞令』というサブ・カテゴリーをみると、日本語母語話者 (34/62) が社交辞令を使うように、日本滞在 1 年以上のグループ (13/62) も社交辞令を使う傾向にある。ちなみに、日本滞在 3 カ月以内のグループ (2/62) は、日本語での社交辞令は殆ど使っていないが、英語母語話者 (9/20) のように、お料理に関する母親の代弁 (7/20) はするようだ。

以上より、日本語学習期間や日本滞在期間が短い方の日本語学習者グループは母語である英語と同様の方略を使う傾向にあるのに対し、日本語学習期間や日本滞在期間が長くなっていくにつれて日本語母語話者が使うような方略を使うようだ。つまり、第二言語・外国語における語用論的能力の習得過程は母語のそれとは異なり、学習年数が増えるにつれ、また目標言語のコミュニティに長く住めば住むほど目標言語における様々な方略を習得するのかも知れない。そして、仮にこれが正しいとすれば、第二言語・外国語における語用論的能力においては、年齢の影響はあまりないことになる。

(4) 総括と今後の研究への示唆

本研究では母語や第二言語習得過程で、年齢が及ぼす影響と語用論的能力習得の関係の解明を試みた。本研究は特に言語習得にお

ける臨界期仮説に焦点を当て語用論分野にもそれを当てはめることができるか否かという疑問を、間接的ではあるが脳と語用論の発達という観点から解明しようとした画期的なものである。

今後の課題として、研究調査の方法論においては、参加者数を増やし、男女の違いや参加者の言語環境をも考慮にいれ、様々な発話行為での比較をし、インタビューを増やしてデータの裏付けをとっていく必要がある。また、中間言語としての日本語研究においては、以上に加え、米国に住むアメリカ英語母語話者のデータや日本語を使って働いているアメリカ英語話者の日本語のデータなど様々な角度から、第二言語習得における語用論的能力習得の時期を考えてみる必要がある。また、同じ話者が母語を話す時と、第二言語を使う時ではどのような違いがあるのかということも分析してみると面白いだろう。更に、語用論的知識があるということとその知識を使いこなせるということの違いなども考えてみる必要がある。調査方法に関しては、談話完成テストではなくもっと自然なデータをとっていく必要があるのかもしれない。

次に、理論構築に関してだが、第一言語習得過程における語用論的能力の習得時期と第二言語習得過程におけるそれとが如何に異なるのかということを中心に心理言語学的、応用言語学的、社会言語学的、そして神経言語学的見地という様々な角度から研究していく必要がある。また、脳の発達と語用論的能力の習得時期との関係 (語用論的能力習得における臨界期) や異なる言語における脳の使用部位の違いなどを間接的なデータでなく直接的なデータを使って解明していきたい。

(5) 参考文献

Ellis, R. (1985). *Understanding second language acquisition*. Oxford: Oxford

University Press.

- Kawate-Mierzejewska, M. (2004). *The critical period in acquiring Japanese pitch accent*. Paper presented at the 27th annual conference of American association of applied linguistics, Portland, Oregon.
- Labov, W. (1966). *The social stratification of English in New York city*. Washington DC: Center for Applied Linguistics.
- Montrul, S.A. (2008). *Incomplete acquisition in bilingualism: Re-examining the age factor*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Scovel, T. (1998). *A time to speak: A psycholinguistic inquiry into the critical period for human speech*. New York: Newbury House Publishers, A division of Harper & Row, Publishers, Inc.
- Seliger, H. (1978). Implications of a multiple critical periods hypothesis for second language learning. In W. Ritchie (Ed.), *Second language acquisition research*. New York: Academic Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 川手ミヤジェイエフスカ 恩 『語用論と臨界期(1) - 身内を語る時』「日本語教育連絡会議論文集 (*Papers presented at the 21th International Conference on Japanese Language Teaching*)」21 巻, 68-81, (2009), 無
- ② 川手ミヤジェイエフスカ 恩 『語用論と臨界期(1)-研究方法の模索-』「日本語教育連絡会議論文集 (*Papers presented at the 21th International Conference on Japanese Language Teaching*)」20 巻, 83-100, (2008), 無
- ③ Fukazawa, Seiji, Teaching sociocultural aspects of English: Eliciting learners' 'Why.' *JBAET Journal 11*, 150-151, (2007), 無

[学会発表] (計7件)

- ① Kawate-Mierzejewska, Megumi. "In what way do age factors influence on the development of pragmatic competence?" The 11th International Pragmatics Conference. (2009年7月15日). Melbourne, Australia.
- ② Kawate-Mierzejewska, Megumi. "Pragmatic competence in first language acquisition and the critical period hypothesis" The 11th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium. (2009年2月8日).

Temple University Japan Campus, Tokyo.

- ③ Fukazawa, Seiji. "A Small Pilot Study of a University-level Japanese EFL Learner's Pragmalinguistic Development in Emails during Study Abroad." The 11th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium. (2009年2月8日). Temple University Japan Campus, Tokyo, Japan.
- ④ Kawate-Mierzejewska, Megumi. Pragmatics and communicative competence. Section II Okayama JALT Seminar. (2009年1月16日). 岡山市 JALT, さんかく岡山 2F.
- ⑤ Kawate-Mierzejewska, Megumi. "Pragmatic competence and the critical period." The 34th Annual International JALT (Japan Association of Language Teaching) Conference and the 7th joint conference of the Pan Asian Consortium as well as the 6th Asian Youth Forum. (2008年11月3日). National Olympics Memorial Youth Center 東京.
- ⑥ 川手ミヤジェイエフスカ 恩 『語用論と臨界期(2)』「日本語教育連絡会議(*The 21th International Conference on Japanese Language Teaching*)」(2008年8月21日). ベオグラード (セルビア)
- ⑦ 川手ミヤジェイエフスカ 恩 『語用論と臨界期(1)』「日本語教育連絡会議(*The 20th International Conference on Japanese Language Teaching*)」(2007年8月17日). マルトンヴァシャー (ハンガリー)

[図書] (計1件)

- ① 川手ミヤジェイエフスカ 恩 『第一言語・第二言語 (外国語) の社会語用論的言語能力の習得における臨界期: 研究成果報告書』全 114 ページ、株式会社ニシキプリント(2009年3月)

6. 研究組織

(1)研究代表者

川手-Mierzejewska 恩
(KAWATE-MIERZEJEWSKA MEGUMI)
聖学院大学・人文学部・講師
研究者番号: 60398542

(2)研究分担者 (平成 19 年度)

深沢 清治 (FUKAZAWA SEIJI)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 00144791

(3)連携研究者 (平成 20 年度)

深沢 清治 (FUKAZAWA SEIJI)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 00144791